



常滑産の朱泥陶器の品質改良を図る研究

常滑地方の特産である朱泥陶器を製造する際の、製法の違いによる品質の評価研究を行った。新旧様々な手法を試し、手触りや風合いなどの違いを発見するに至る。

本業の動向について

湯呑、急須の製造を主要業としている。法人からの受注生産もある。

東日本大震災の影響で消費者の買い控えがあり、業界全体で間接的なダメージを受けている。また、嗜好品という性質上、趣味の範囲にとどまり消費者人口も多くは無い。その上、同業の大手は皆、生産コストが安く済む海外へと製造拠点を移してしまい、この廉価な製品を贈答品として利用する消費者も多いため、ますます国内産製品の需要は圧迫されている。こういった現状に立ち向かう為、日々研究に勤しみながら、小学校などでお茶の淹れ方の指導をするなど伝統文化の普及活動もしている。

公設研究機関との連携事業について

連携先公設研究機関の名称

あいち産業科学技術総合センター
常滑窯業技術センター

所在地

愛知県常滑市大曾町4-50

連携内容

朱泥陶器製造における大量生産向けの製造手法と昔ながらの製法との仕上がりの差を詳細に分析した。

また、プロパンガスと穴窯での焼き上がりの違いについての分析などの依頼もしている。穴窯で焼き上げた場合はプロパンに比べ、きれいな緋色が出ることから要因を追求しようと考えた。

連携した動機やきっかけ

常滑産の朱泥の需要が減ってきていることに危機感を持ち、改善の策を考えていた。異業種の知り合いからのアドバイスを受け、原点に戻った製法を用いて製作過程の見直しを図ることにした。この結果を後学のためにデータ化しておくため分析依頼をした。また、同機関内に叔父が居たことも公設試験研究機関利用のきっかけのひとつである。

連携の効果

分析結果をすぐに商売につなげようといった考えは持ち合わせていなかったが、これからの創作活動に応用ができると考えている。

連携して最も効果のあったこと

専門機器を用いて詳細なデータを得られたこと。

連携して最も困難だったこと

地場産業に対する専門知識のある研究員が減ってきていること。逆に質問をされ指導を行うこともしばしばある。

連携するメリット・デメリットについて

親身になって取り組んでもらえることや、研究分野の中から新たなつながりが生まれることがメリット。

連携に際しての注意、アドバイスなど

現状に満足してしまうとすべては止まる。常に疑問や好奇心を持つことが「ものづくり」には大切なこと。

また、初回のチャレンジを面倒に思わないこと。向上心がなくなっていたり、他の真似事ばかりしているところが多くあり、企業側の意識改革も必要と考える。

研究結果を聞くだけで終わりせず、自社で応用していく姿勢を持つと共に、情報の相互公開を念頭に置かなければいけない。聞きっぱなしでおしまいという企業が多いが、企業側の協力姿勢がないと機関としても前向きに取り組むことはできないと思われる。

公設研究機関との連携で行政に望む支援

周囲の同業から聞く意見では、何を頼んでいいのかわからなかったり、頼む際に敷居が高いイメージがあったり、そもそも存在自体を知らないということが多数ある。これを改善する為に積極的な支援のアピールを行って欲しい。また、アナログな考えを持つ人も多い業界の為、広報の方法などにも配慮が欲しい。

会社概要

設立:昭和49年1月1日

資本金:なし

従業員数:2名

URL:なし